川上弘美「蛇を踏む」に見る一体化

――「知らないふり」の所在――

松藤梨紗

一、はじめに

川上弘美の「蛇を踏む」は、一九九六年三月に『文學界』で発表された、第一一五回芥川賞受賞作である。「蛇」を踏んだヒワ子と、ヒワ子に踏まれ「お母さん」に変身した「蛇」の奇妙な同居生活を描いた本作は、芥川賞選評時より、「『今昔物語』以来の変身譚の系譜」（池澤夏樹）[1]のような「古典的」という評価と、「現代日本の若い女性たちの深層意識の見えない戦い」（日野啓三）[2]のような「現代的」という評価が並存してきた。一方で、石原慎太郎が「蛇がいったい何のメタファなのかさっぱりわからない」[3]と述べたように、象徴性の高さゆえに物語の全貌を理解し難いのもまた事実である。そのため、説話や発表当時の社会状況等の照合を通じて、「さっぱりわからない」「蛇」、ないしは「蛇」がヒワ子を誘う「蛇の世界」の解釈を提示する論考が発表されてきた。

「蛇の世界」は、「暖か」く「裏切られ」ることがない・「あたしと違ったところ」がない世界であると、「蛇」とニシ子によって語られている。研究では、こうした「蛇の世界」について、「母の世界」とするものと、「性愛の世界」とするものに大別される。

まず、「蛇」が「お母さん」を名乗るため、「蛇の世界」を「母の庇護／監視下の世界」とする見解は比較的多く見られる。河守ひとみは「蛇の世界」の持つ他者性のなさや暖かさから、ヒワ子の「無意識下の母胎回帰の願望」を見出す。[4] こうした「蛇の世界」に母のイメージを見出す読みは、家庭・家父長制の寓意を孕んでいるとする読み[5]に拡大・一般化する傾向があると松本和也が指摘している。[6] 河守の見解はヒワ子を「娘」、「蛇」を「母」と位置づけるものだが、与那覇恵子[7]の「母へと脱皮するかもしれない（中略）若い女性の持つ性・結婚・家庭にまつわる快、不快というアンビバレントな深層意識」という見解は、松本が指摘したような、「蛇の世界」に、「娘」から「母」への変化の強制をはじめとする、女性たちにまとわりつく家父長制のイメージを読み取った明快な例といえる。

次に、「性愛の世界」とする読みについて、宇野憲治[8]は男女間、千石英世[9]は女性同性間での性活動のイメージを持つ世界と指摘する。性行為から連想される人肌の温度感、他者との距離感の排除のイメージも、「蛇の世界」の「暖か」さ・「あたしと違ったところ」のなさと一致する。作中でヒワ子は、ニシ子が「蛇の世界」に言及したのちの場面で、性行為中に相手が蛇になった体験を回想する。よって、ヒワ子のなかで「蛇の世界」と性的なイメージの結びつきがあるのも確かである。

ここまで示した「蛇の世界」の解釈は、これまで共通点を持たない別個の読みとしてそれぞれ捉えられてきた。河田小百合が「論者それぞれの論考が並立して存在している」[10]と指摘したように、「蛇の世界」の解釈は氾濫状態にあるといえる。しかし、「母の世界」と「性愛の世界」の解釈は相補的な関係にあるものとも考えられる。「夜のことだって絶品」で、卵から生まれた蛇の「母親」である願信寺の大黒さんはその好例だ。先述した宇野も性愛説と並行して「蛇の世界」の持つ母のイメージも指摘しており、二つの説が並存可能であることが窺える。この二点に加え、「蛇の世界」の解釈ではないものの、ヒワ子と「蛇」を同一の存在とする論者がいることも触れておきたい。カトリン・アマン[11]と、先に触れた河田小百合[12]は、「蛇と私の間には壁がな」いイメージを発展させ、「蛇」はヒワ子の分身という見解を述べる。こうした他者性の喪

失を強調する分身説も、自己の消失や忘我のイメージを持つ「母の世界」「性愛の世界」と近しい見解とも捉えられる。このように、ここで挙げた三点の見解はいずれも「蛇の世界」のイメージのなかでも特に他者性のなさに主眼を置いている。別個の読みとされてきたこれらの解釈には、一歩進めれば、「他者との一体化」という共通点を見出すことができるのではないだろうか。

こうした「他者との一体化」は原善が既に指摘したイメージでもある。原は「川上弘美作品の中では、主体と客体の融合、自己と他者の一体化が常に希求されている」[13]とする。実際、作中でヒワ子が「蛇のもとに下る」ことに対して「私の奥にある固いものがどうしても私を蛇に同化させてくれない」と語るほか、殴りかかったヒワ子の拳を体内に取り込む「蛇」、自身の蛇が「つぶれ」ると連動して死にかけるカナカナ堂のニシ子の描写もあり、「蛇の世界」ないしは「蛇の世界」への参入に、一体化のイメージが含まれているのは明らかである。それゆえ、そのイメージは母娘問題、性愛、分身という形で繰り返し指摘されてきたのだが、一方で、一体化という行為の具体的な性質や構造を踏まえた論考は、管見の限りでは見られない。一体化の語を用いた原についても川上作品を総括するなかで指摘したに留まり、一体化を軸とした「蛇を踏む」単独での分析は未だ十分に行われていないともいえる。

また、ここまで挙げた〈母〉・〈性〉の見解にも検討すべき余地はある。まず、「母の世界」について、川上弘美は「母子幻想の破壊」をテーマにしたのかと問われると「あれは母娘というよりも……。微妙に逃げているかもしれません。母娘の問題を、私はまだ書けていないんですね」[14]と否定気味に答える。この発言を踏まえると、「蛇」や「蛇の世界」を、母娘問題や家父長制のイメージのみで語ってしまうのはやや性急ではないかと考えられる。二点目の「性愛の世界」についても、先述した性行為の回想の場面で、ヒワ子は相手が蛇になった際、「ぞわりとした粟立つような感じ」があったと言及したのち、「この蛇は私を粟立たせたりはしない」と比較する。こうした語りからは、ヒワ子のなかで、性行為の相手と「蛇」は根本的に異なるものとされていることが窺われ、〈性〉と「蛇の世界」も単純に同一視できないように思われる。

以上、「母の世界」・「性愛の世界」説には「蛇の世界」の特徴や語り、川上の認識と合致する点・しない点があること、先行研究での評価は「一体化」という共通点を持つ一方、そのイメージが殊更強調されてこなかったことを確認した。「蛇の世界」のイメージが「母の世界」と「性愛の世界」で補い切れないのならば、それらの空白を担う新たな「一体化」の要素を検討する必要があるだろう。そこで、注目したいのが〈食〉の視点である。

二、〈食〉〈性〉〈死〉の横断

川上弘美は〈食〉を重視する作家だ。「蛇を踏む」においても、初めてヒワ子の家に現れたときでも、ヒワ子が蛇に苛まれているときでも、意に介さずに料理を振る舞う「蛇」の姿が見られる。インタビューで川上は「食べ物の話は意識して書こうと思っています」[15]といった食事へのこだわりを繰り返し述べている[16]。そうした川上の姿勢については松浦寿輝が、「無意識的な欲望」の享受が許される時間であるため、川上は食事を重視している、とも解説している[17]。

「蛇を踏む」の食事の場面も川上の強い意志のもと描かれていることが推察されるが、一方で、本作の食事について言及した資料は意外にも多くない。言及した論者についても、「自分でつくったような味」がする食事を「ごく自然に並べ」る点から「蛇」とヒワ子の同質性を読み取るカトリン・アマン[18]、「懐かしく感じてしまう」ような手料理を振る舞う点・「蛇」が固有名詞を当てられない点から、「〈母〉という名でしか呼ばれな」くなっていく女性と炊事の結びつきの強固さが暗示されているとする小平麻衣子[19]というように、分身、ジェンダーの寓意などの読みを補強する副次的な要素としか捉えていない様子が窺える。

こうした潮流のなかで、「蛇を踏む」に直接言及したものではないが、文芸評論家の榎本正樹が興味深い指摘をしている。『溺レる』に関する対談で榎本は、川上の作品は「食と性と死がボーダーレスにつながって」いると述べ、川上は「構造と

いうふうには考えていなかった」としつつも、「男の人と女の人が恋愛する時、たいてい最初にものを食べて（中略）セックスする」流れがありそれに従っているとも答える。[20]

榎本が指摘した〈食〉〈性〉〈死〉の横断は、川上作品の特徴の一つといえる。『溺レる』以外では、代表作として挙げられる『センセイの鞄』も、「居酒屋」で再会した恩師との「肉体接触」を含む恋愛模様と「死別」を描いており、〈食〉〈性〉〈死〉が連鎖する構造を読み取ることができる。先に挙げた川上の発言は男女関係が前提ではあるが、「蛇を踏む」も、「食事」を振る舞う「蛇」に心を許したヒワ子は「蛇の世界」に「性行為」を幻視、結末部ではしびれを切らした「蛇」とヒワ子が「首を絞め合う」という流れを踏襲している。ヒワ子と女の姿の「蛇」の関係とは言え、〈食〉の視点や、そこから発展する横断の構図は切り捨ててはならない問題といえるだろう。

横断する〈食〉〈性〉〈死〉について、そもそも〈食〉と〈性〉は重ねられることの多い領域とされている。児童文学者の川端有子は、生々しい性表現を避ける児童文学においては、〈食〉がそれらの代替になると指摘する。[21]代替となる理由として、「自分に侵入してくる食べ物」という身体感覚に結びついた印象が「セクシュアリティを強く想起させ」ることを川端は挙げている。川端の指摘するように、異物を取り込み身体の一部とする〈食〉もまた、一章で「蛇の世界」に共通すると述べた、一体化のイメージを持つ行為と位置づけられる。

また、精神科医の大平健は、〈性〉と〈食〉は他者との「交流性・一体化」の他にも、「攻撃性・被攻撃性の領域」を有するという共通点があることを指摘している。[22]〈食〉は他者を自己に取り込む／自己が他者に取り込まれる行為であると同時に、殺し食べる者と殺され食べられる者が必ず存在する行為でもある。こうした交流性と攻撃性のイメージが並存する〈食〉の構造が、〈性〉の構造と一致しているために、両者の等価交換は可能になるのである。

〈性〉に伴う一体化・交流性は周知の通りだが、攻撃性については、ジョルジュ・バタイユの『エロティシズム』[23]に詳しい。バタイユは、一方が能動的に行動し、確立した自我を持つ他者を忘我の領域に至らしめ同化する性行為は、「存在を危機に

投じる行為」であるとする。「閉じた存在の構造を破壊する」とバタイユが述べるように、相手の存在や意思を疑似的に破壊するという点で、性行為は暴力や殺人といった〈死〉にまつわる活動に類似している。ここから、〈性〉も〈食〉と同様、存在を破壊する者と破壊される者が存在し、先の大平の言う、交流性・一体化／攻撃性・被攻撃性の構造で成立していると分かる。さらには、〈食〉と〈性〉が類似し、〈性〉が〈死〉と類似しているならば、〈性〉と同じ構造を有する〈食〉もまた〈死〉と近しいイメージを持つ行為であるとも導ける。

ここまで〈食〉〈性〉〈死〉の横断とその構造の類似性を確認したが、一章で触れた「母の世界」にもそれらとの類似性を見出すことができる。「母性原理」の概念を以て「蛇の世界」を分析する佐藤泉は、「外敵が迫ったときに子どもを呑み込む「動物の母親」を例に挙げ、「わが子」を「個性や能力と関係なく可愛」がり「自我」を「呑み込んでしまう」「母親」像に触れている。[24] 佐藤の挙げた、子どもを呑み込む動物の母からは直接的な〈食〉のイメージ、個性や意思を無視するという点からは相手の存在の破壊に近しいイメージを読み取れ、「母の世界」もやはり〈食〉と〈性〉、そして、〈死〉と類似した構造を持つ世界と推測できる。

「蛇の世界」の持つ〈食〉〈性〉〈死〉のイメージを踏まえて確認したいのが、「蛇」がヒワ子を「蛇の世界」に誘う場面である。「蛇」は「頬ずりをしながら」ヒワ子に両腕を「巻きつけ」る。最終的に二者は「対になったもののように（中略）お互いの体に巻きつけあう」が、蛇という生物が他の生物に巻きつくのは、雌雄が絡み合う交尾時[25]と、体全体で獲物を絞めあげる捕食時[26]とされる。こうした動作面にも「ヒワ子ちゃんのお母さん」を名乗る「蛇」がヒワ子に性欲と食欲とが入り混じった感情を向けていることが表れているのだ。その「蛇」が、先述したように〈食〉〈性〉〈死〉の流れを踏襲しヒワ子と交流する点からも、本作の根底に自他融合のイメージが貫かれていると分かる。

以上のように、川上作品および「蛇を踏む」に見られる〈食〉〈性〉〈死〉の横断は、〈食〉〈性〉が交流性・一体化の領域と攻撃性・被攻撃性の領域を併せ持っていること、〈食〉〈性〉の攻撃性の領域が〈死〉と類似していることによって成

立していた。〈食〉〈性〉に共通する交流性・一体化／攻撃性・被攻撃性の構造は、研究において指摘されてきた「母の世界」にも確認される。さらに、「蛇」の行動にも〈食〉〈性〉〈死〉と、〈母〉の横断は認められた。こうした〈食〉〈性〉〈死〉、〈母〉の横断から、「蛇の世界」及び物語世界には、一章で述べたような一体化のイメージがやはり散りばめられていることが見えてくる。そして、これまで研究では一体化が殊更強調されてこなかった点を踏まえると、この観点から考察することで問題の所在を明らかにできる箇所は、「蛇の世界」のイメージ以外にも存在しているのではないかと推測する。次章では、一体化のイメージと、一体化と不可分な関係にある〈死〉のイメージの視点から、ヒワ子と「蛇」の言動の考察を試みる。

三、「蛇」の愛／「知らないふりをする」ヒワ子

食欲と性欲とが入り混じる情欲をヒワ子に抱く「お母さん」の「蛇」。そうした「蛇」の欲望を受容すること、つまり、「蛇の世界」に参入することとは、蛇たちとの一体化の了承とほぼ同意であるとは一章でも触れた。この「蛇の世界に行く」行為について、『高野聖』等との比較対照を行ったレズニク・クセニヤは「蛇になって蛇の世界に行く[27]」と、ヒワ子が蛇という種族に変身し「蛇」とともに「蛇たちが住む世界」に行くという変身譚的な解釈を示している。変身譚的解釈は芥川賞選評時から存在し、加えて、蛇の気配が充満する部屋でヒワ子が「蛇になどなるまい」と念じる描写があるため、当然、一定の説得力を持っている。しかし、ここまで確認してきた、作中に散りばめられる一体化の表現、〈食〉〈性〉〈死〉の横断を考慮すれば、「蛇の世界に行く」行為の根底には、変身というより、捕食・性交等を通じて「蛇」のなかに取り込まれ、肉体などの「『蛇』を構成する世界」の一部になるイメージが存在しているとも捉えられるだろう。

二章で確認したように、〈食〉や〈性〉において、一体化は攻撃・被攻撃という暴力的な領域と表裏をなすとされている。〈食〉〈性〉、そして、〈母〉の領域に底流する、そうした攻撃性や、攻撃性の極致にある〈死〉のイメージを鑑みると、「蛇」

との一体化は、直接的または疑似的な、ヒワ子の存在の消滅をもたらすとも考えられる。一方で、「蛇の世界」に誘うのか、一体化を希求するのかは作中で明かされない。最終場面で「もう待てな」くなった「蛇」は「蛇の世界に来ない」ヒワ子の首を締めにかかるが、「首なんか締めたら死んでしまう」というヒワ子の叫びに、「蛇」は「だって待てない」と返す。「蛇」の発言には、ヒワ子の死よりも、ヒワ子を「蛇の世界」に連れてくることのほうに意識が向いている様子が見受けられる。一体化と攻撃のイメージが近しい関係にあるとはいえ、「蛇」がヒワ子を殺そうとしているとは考えにくい。

そこで、「蛇」はヒワ子を愛しているがゆえに一体化を望んでいるのではないかと推測する。例えば、食事中に「蛇」が架空の思い出を語る際、「蛇」はヒワ子に「愛しそうな視線」を向けている。そして、「蛇」は女性の姿から「蛇らしい様子」になりながら「あたしヒワ子ちゃんが大事だわ」と語りかける。「食事」という一体化が示唆される場面で、こうした「蛇」の持つヒワ子への愛情が描かれるのは象徴的といえるだろう。さらに、「蛇」だけでなく、ニシ子も自身のもとにやって来た蛇への愛情を語っている。ニシ子は「蛇の世界」に行かなかったことへの後悔をヒワ子に語った際、「もうすぐ死ぬ」自身の蛇について、「こんなに愛してるのに」と述べる。続けて、「あたしはね、蛇になりたかった。どうしてあのとき蛇の世界に行かなかったのかしら」と話しており、ニシ子の発言のなかにも愛情と「蛇の世界に行く」こと、つまり、一体化の結びつきを確認できる。

このように、「蛇」とニシ子の言動には愛情と一体化の連関があることが表れているが、加えて、本作が芥川賞を受賞した直後に発表された「惜夜記」の「ビック・クランチ」においてもその結びつきを見て取ることができる。「ビック・クランチ」では、主人公の女性が少女にくちづける様子が描かれる。くちづけの末、最終的に真珠大になった少女を女性は呑み込むと、「終いには少女が自分であるのか自分が少女であるのかわからなくな」って「初めて少女を愛しむような心持ちになった」[28]と語る。「ビック・クランチ」については、千石英世も「ほとんど人肉色（ママ）」だが、少女が血管を通じて主人公の

全身に広がることで、少女への愛からナルシシズムへと変化すると言及している。[29]〈食〉を通じた一体化が、「蛇を踏む」と執筆時期が近い作品においても愛情のモチーフとして用いられている。ゆえに、「蛇」がヒワ子を愛しているからこそ、極めて暴力的でありながら、「あたしと違ったところ」をなくす、究極の相互理解の手段でもある一体化の実行をヒワ子に持ちかけたと導けるのである。

こうした「蛇」の愛情表現とも言うべき「蛇の世界」への誘いに対して、ヒワ子は曖昧な対応を続ける。「蛇」に初めて「ヒワ子ちゃんも蛇の世界に入らない?」と持ちかけられた際は「それほど魅力を感じなかった」と消極的だが、先にも触れたニシ子の「蛇の世界は(中略)暖かくてぜんぜんあたしと違ったところがな」いという語りを聞くと、「ニシ子さんの言うことを(中略)鵜呑みにすればすぐにも蛇の世界に行けるのだろうか」と肯定的に反応したり、時には「蛇の世界なんてないのよ」とその存在ごと否定したりもする。ヒワ子の煮え切らない態度に対し「蛇」は最終場面で「だってヒワ子ちゃんはいつまでたっても知らないふりばかり」と非難する。「蛇」、そして、ヒワ子自身も繰り返し語る、この「知らないふり」という言葉自体、なにを「知らないふり」しているのか明言されないまま、物語は終了していく。

ヒワ子はなにを「知らないふり」をしているのか。一つは「蛇」の愛情と指摘できる。「ヒワ子ちゃんのお母さん」という名乗りに「意味がわかりません」とヒワ子が疑念を露わにすると「いつもそうやって知らないふりをするのね」と「蛇」は難色を示す。そして、「そう言われても、わからないものはわからない」と戸惑いつつも反論できないまま食事を始めてしまったヒワ子は「女が「ほら知らないふり」と心の中で笑っている」ように感じる。このように、「蛇」は「お母さん」である自身を拒否する言葉を発しつつも、食事を通した疑似的な一体化は許してしまうヒワ子を批判する。この場面の他、一章でも触れたが、「蛇は私を粟立たせたりはしない」と性行為の相手と「蛇」を線引きしたことに対しても、「女は、そのことを、知らないふり、と言って蔑むだろうか」とヒワ子は逡巡している。性行為の相手がもたらした「粟立」つような不快感を「蛇」はヒワ子に与えない。むしろ、「蛇」に頬ずりされながら巻きつかれた際に「満ちた気持ちになった」と語っ

ているように、ヒワ子は「蛇」と肌を合わせることに快感を覚えている。「蛇」との触れ合いと、その先にある一体化は、〈性〉以上に特別快いものであると悟っているにも関わらず、ヒワ子は「蛇の世界」への誘いには乗らないのだ。こうした性行為の相手と「蛇」の線引きにも、先に確認した食事の場面のような、ヒワ子の言葉と感覚の不一致が認められる。ここから、「蛇」が「知らないふり」と非難するのは、ヒワ子が愛情表現を言葉では拒否したり「わからない」と語ったりする一方で、行動では受容する、矛盾した姿勢を見せたときと推察できる。

ヒワ子が「知らないふり」をするのは「蛇」の愛情だけではない。先に挙げた「蛇の世界」に肯定的な反応を示した場面の直後、ヒワ子は「（ニシ子の語りを：稿者注）鵜呑みにして蛇の世界に入って知らないふりをして眠っていられるのだろうか」「知らないふり、その言葉を思いつくと急に背中いちめんがぞくぞくした」と語る。この二点の語りが、「蛇」がヒワ子を非難したものや、「蛇」がそう言うだろうとヒワ子が予想したものではなく、ヒワ子自身が「知らないふり」をしようと意識したものになっている点は看過できない。先述した通り、ヒワ子は「蛇」に「知らないふり」を指摘されると「わからない」と戸惑う様子も見せる。「蛇」から非難されても意識できない「知らないふり」と、対象は不明瞭ながらも主体的に行おうとする「知らないふり」は異なる行為であるように思われる。

ヒワ子が主体的に「知らないふりをする」のは、一体化と表裏の関係にある攻撃性、〈死〉のイメージではないかと推測する。繰り返す通り、ヒワ子は、ニシ子から「蛇の世界」は「暖かくてあたしと違ったところがな」い世界であると語られ、その語りを「鵜呑みにして」「蛇の世界」に入れば「知らないふりをして眠っていられる」と考える。ニシ子の語る「暖かさ」や「あたしと違ったところ」のなさは、ここまで確認してきたような、〈食〉や〈性〉の持つ交流性の快楽を想起させる。一方で、〈食〉や〈性〉は、一体化・交流性の領域だけでなく、攻撃・被攻撃の領域も有する行為であった。〈食〉や〈性〉、加えて、〈母〉の持つ「暖かい」交流性の快楽のみを享受しようとも、その裏にある暴力的な〈死〉のイメージは必ず付きまとうのである。ヒワ子が「知らないふり」を意識した際に生じた「ぞくぞく」とした感覚は、そうした一体化と不可分

な関係にある、存在の危機に対する本能的な恐怖とも捉えられる。実際、この場面の以外では、蛇に対するものかニシ子に対するものか判別のつかない恐怖心を抱く、ニシ子の夫・コスガに相対した際にも、ヒワ子は「蛇」に「知らないふりをするのね」と言われたことを思い出しており、彼女のなかで「知らないふり」と恐怖心が結びついていることが見えてくる。

こうしたヒワ子の「知らないふり」と恐怖心の結びつきについては、二章でも触れたバタイユの議論がやはり参考になる。バタイユは、人間は「理解しがたい出来事のなかで孤独に死んでゆく個体」であり、「滅びゆく個体性が少しでも存続してほしい」という願望に基づき欲望すると主張する。[30] 性行為等の「疑似的な死」をあえて欲望して体験し生還することで、「孤独」や「死」に対する恐怖を人間は乗り越えていくというバタイユの理論は、〈死〉と近しい関係にある一体化のイメージを有する「蛇の世界」への参入を忌避しながらも望む、ヒワ子の矛盾に満ちた反応と一致する。しかし、ヒワ子が「蛇の世界」や自身の心情変化の根底にある〈死〉のイメージに自覚的か否かの確定は水掛け論の様相を呈することが予想されるため、これ以上の検討は行わない。むしろ注目したいのは、「蛇の世界」への認識や「知らないふり」の指すものが、ヒワ子と「蛇」で異なる点である。

「蛇」は愛するヒワ子を「蛇の世界」へ誘い、ヒワ子は「蛇の世界」に恐怖する。ヒワ子は「蛇の世界」の「暖か」さのみを享受するために恐怖心の「知らないふり」を試みるが、そのようなヒワ子の矛盾した態度を「蛇」は愛情を「知らないふり」していると非難する。両者の間に生じる齟齬は、一体化と、一体化と表裏をなす攻撃性のイメージによってもたらされている。ヒワ子は本章で確認してきた通り、「蛇の世界」をやや恐れるなど、「蛇の世界」への参入、つまり、「蛇」との一体化に交流性よりも、その裏にある攻撃性のイメージを強く感じ取っている。対して、「踏まれたので仕方ありません」と言い「食事」や「架空の思い出」をヒワ子に押しつける姿に象徴されるように、「蛇」は愛情ゆえに交流性を強調する一方で、個の破壊とも言うべき他者への侵犯には無自覚だ。このように、ヒワ子は攻撃性、「蛇」は交流性というように、両

者はそれぞれ一体化に異なるイメージを見出しているのである。そして、ヒワ子は、「どうせ気味の悪いものにならも答えてもいい」と恐怖と諦念の混じった感情のもと、次第に「蛇」と親しみ始め「蛇の世界」にも惹かれていく。その心情の変化には、先に確認したバタイユの思想を喚起させると同時に、攻撃性から交流性へと主眼が移るさまも見て取れる。しかし、ヒワ子は完全には「蛇」を受容せず、最終的に首を絞め合うことになる。「蛇の世界」と「知らないふり」をめぐるディスコミュニケーションと、「気持ちいいんだか苦しいんだか」決着もつかないまま「流されてゆく」二人の姿には、他者との一体化における交流性と攻撃性のイメージの分かちがたさが象徴的に表れている。

四、おわりに

本稿では、一体化というキーワードを以て、「蛇の世界」の構造と、「蛇」が「蛇の世界」にヒワ子を誘う理由、「蛇の世界」に対する反応がヒワ子と「蛇」で相違する理由を考察した。

先行研究において、「蛇の世界」は「あたしと違ったところがない」点に主眼が置かれ、「母の世界」「性愛の世界」といった「自他の境が消失した・他者と一体化する世界」であるとの解釈が示されてきた。そうした「他者との一体化」のモチーフは、川上作品の特徴と位置づけられる一方で、「蛇を踏む」研究においては十分に検討されてこなかった。この点を踏まえ、改めてテクストを読むと、〈食〉と〈性〉と〈死〉が連鎖する物語構造や、「お母さん」の「蛇」が食欲と性欲が入り混じった情欲からヒワ子を「蛇の世界」に誘う様子が見受けられ、他者への攻撃性の領域と表裏をなす一体化のイメージがやはり底流していることが見えてくる。

「蛇の世界」への参入は、「お母さん」の「蛇」の〈食〉と〈性〉が混在した欲望を受容することで成立する。「蛇の世界に行く」とは、従来「蛇になって蛇の世界に行く」といった変身譚的解釈がなされてきたが、作品世界の根底に貫かれる

一体化のイメージを踏まえると、捕食・性交等を通じて「蛇」に取り込まれ、「『蛇』を構成する世界」になる行為であるとも捉えられる。一体化が攻撃性の領域、つまり、〈死〉の領域と不可分な関係にあるため、「蛇」との一体化はヒワ子の消滅を招く可能性があるものの、「蛇」はそうした暴力的なイメージよりも交流性のイメージを強調し、愛情表現としてヒワ子に「蛇の世界」への参入を持ちかけていることが窺える。対して、ヒワ子は「蛇の世界」に、一体化の裏に存在する攻撃性のイメージをより強く感じ取っているために、そこへの参入に恐怖しつつも次第に惹かれていく。このように、ヒワ子と「蛇」は一体化に見出すイメージが異なっている。その認識の相違が両者の間の齟齬を生じさせ、最終場面での争いを招いたのである。交流性の「蛇」が勝つこともなく、攻撃性のヒワ子が勝つこともない、「何百年」も「繰り返している」ような」争いは、他者との一体化をめぐる、ある種普遍的な葛藤を読者に提示している。

注

（1）文藝春秋「第115回芥川賞発表——蛇を踏む　川上弘美（含　選評）」（『文藝春秋』第74巻11号、1996・9）

（2）注1に同じ

（3）注1に同じ

（4）河守ひとみ「川上弘美作品を説話から論じる——「北斎」・「竜宮」・「蛇を踏む」」（『ゲストハウス』6号、2014・4）

（5）ジェンダーの寓意という解釈を示す論者としては、後に挙げる与那覇の他に、押山美知子（「「蛇を踏む」——女たちの果てしない戦い」『現代女性作家読本①　川上弘美』鼎書房、2005・11）、星野久美子（「蛇を踏む」『現代女性作家読本①　川上弘美』鼎書房、2005・11）、伊原美好（「AJLS パネル発表および学会報告 川上弘美の「蛇を踏む」「センセイの鞄」から——ポスト・ジェンダー社会の中で「他者」との共存をさぐる」『Rim』第11巻3号、2009・12）がいる。

（6）松本和也「蛇（と母）に関する寓話—実際の話——「蛇を踏む」」（『川上弘美を読む』水声社、2013・3）

（7）与那覇恵子「現代女性の深層意識を映す「蛇」　川上弘美『蛇を踏む』」（『サンデー毎日』１９９６・１０・２０）

（8）宇野憲治「「蛇を踏む」論――だいじだいじぃ～だいじなものはぁ～――」（比治山女子短期大学女性文化研究センター『年報』12号、１９９７・３）

（9）千石英世「甘噛みのユートピア　――川上弘美論」（『文學界』第57巻10号、２００３・１０）

（10）河田小百合「川上弘美「蛇を踏む」論」（『学芸国語国文学』41号、２００９・３）

（11）カトリン・アマン『歪む身体　現代女性作家の変身譚』（専修大学出版局、２０００・４）

（12）注10に同じ

（13）原善「川上弘美の文学世界」（『現代女性作家読本①　川上弘美』鼎書房、２００５・１１）

（14）川上弘美・榎本正樹「川上弘美　全作品を語る」（『文藝』第42巻3号、２００３・８）

（15）本の雑誌社「作家の読者道：第7回　川上弘美さん」https://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi07.html（２００１）（２０２２年8月15日閲覧）

（16）注15に示した資料以外では、注14で示した対談内でも、「小説の中で飲んだり食べたりするシーンを、川上さんは大切にされていますね」と指摘された際、「大切ですね」と肯定し、主人公の心境を食べ物で表現する特徴があるかもしれないという旨の自己分析している。

（17）松浦寿輝「解説　――分類学の遊園地」（『蛇を踏む』文藝春秋、１９９９・８）

（18）注11に同じ

（19）小平麻衣子「川上弘美と〈食〉　女は、居酒屋で」（『古典文学から現代文学まで　「食」の文化誌』學燈社、２００４・３）

（20）注14に同じ

（21）川端有子・西村醇子『子どもの本と〈食〉　物語の新しい食べ方』（玉川大学出版部、２００７・１）

（22）大平健『食の精神病理』（光文社、２００３・１０）

（23）ジョルジュ・バタイユ著・酒井健訳『エロティシズム』（筑摩書房、２００４・１）。なお、二章で示した〈食〉と〈性〉の横断の詳細については、赤坂憲雄『性食考』（岩波書店、２０１７・７）を参照されたい。

(24) 佐藤泉「古生物のかなしみ　『蛇を踏む』」(『ユリイカ』第35巻13号、2003・9)
(25) クリス・マティソン著・千石正一監訳『ヘビ大図鑑』(緑書房、2000・11)
(26) ハーベイ・B・リリーホワイト著・細将貴ほか訳『ヘビという生き方』(東海大学出版部、2019・4)
(27) レズニク・クセニヤ「〈蛇・女〉を正当化する諸方法―川上弘美の「蛇を踏む」と泉鏡花の『高野聖』との比較分析―」(筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』29号、2011・11)
(28) 川上弘美「惜夜記」(『蛇を踏む』文藝春秋、1999・8)
(29) 注9に同じ
(30) 注23に同じ

(国文学科四年生)